

コロナ禍における地下アイドルファンの現状と今後

高橋 雄紀

地下アイドルは、コロナウイルスが感染拡大した影響により、2020年までのコロナ禍以前と同様にライブを行うことが困難になった。そこで本論文では、今までと違ったライブスタイルを受けた地下アイドルファンに着目し、ファンの行動や意識に以前とどの様な変化があったのかを、明らかにすることを目的とした。

地下アイドルの先行研究では、まず地下アイドルのライブが行われる現場の魅力に注目し、外の世界とは無縁となったライブハウスで一回限りの反復不可能な経験をするのが現場に行く魅力であるとされている。次に、ライブにおける視線の相互性について調べ、ファンが声援やペンライトを振るといった行動には、アイドルに見てもらうための視線の獲得活動であり、見られることでファンは排他的な経験になることが分かった。

次に、コロナ禍になり変化した部分についてライブと特典会を参与観察して現状を把握した。そこで、ライブ最中のファン行動や会場ルールの変化に加え、制約付き特典会の現状と課題点を見つけた。

以上を元に、地下アイドルファン36人に対してコロナ禍において、ライブ・イベントに対する考えとアイドルに対する考えについてアンケートを取った。アンケート結果として、コロナ禍の制約付きライブや特典会であっても楽しむことが出来ていて、オンライン配信よりもコロナ禍であっても実際にライブハウスに足を運びたいファンが多くいることが分かった。アイドルに対してのアンケート結果では、コロナ禍だからこそ応援したいと思うファンが多く、コロナ禍以前よりもSNSでのコメントや応援が増加したファンの存在などが分かった。

アンケート結果から見られた課題として、オンラインでのライブや特典会の改善であった。ライブは現状では空間的問題などから現場に行くのが最善であり、今後VRやARといったテクノロジーによって改善できることを考えた。オンライン特典会では、現状はアイドルと会話をするだけであるが、それ以外に共同作業をすることがアイドルとファンの関係を保てると考えられる。

本論文では、コロナ禍の地下アイドルファンの意識の変化や応援方法などの行動の変化明らかにし、課題と地下アイドル文化の今後について論じた。